

「彼れが祇園さんや」

「ほんにぎおんさんな人やなア」

「洒落を云ひな」

圓山二軒茶屋、八坂の塔、高蓋寺、清水坂、大谷鳥邊山大佛さん、耳塚三十三間堂と見物致しまして出て來ましたのが伏見街道。

「サア早う歩き、何をぼうーとしてるね」

「別にぼうーとしてる譯やないけど、京で子供の土産を買ふて歸らうと思ふてコロツと忘れたんで何を買をと思案をしてるね」

「子供の土産なら伏見人形でも買ふて歸りいな」

「伏見人形て何んや」

「この稻荷山の土で焼いてある人形や、此所の人形は持つて歸つて破れても其の土が元の稻荷山へ返ると云ふねん」

「そんな人形を賣つてるか」

「此の邊は人形屋ばかりや」

「ほんに、仰山人形屋が有るなア」

「オイ見てみ、段々職人が上手に成るのか器用に成つたんか、何の人形も焼物と見えぬ羽二重細工の様な、どうや世帯道具は何一つ無い物は無い、焼物で皆出來てるやろ」

「そうかいな、けども見渡した所が横槌が無いな」

「コレ、焼物の横槌が使へるか」

「お前今焼物で何でも有ると云ふたがな」

「そら何でも有ると云ふたけど、焼物の横槌が有るかいな、其他の物なら有ると云ふねん」

「打盤が無い、ほこりたゝきが無い、箒が無い、把火器が無い」

「オイ、お前無い物ばかり選つてるがな、彼の棚に有る大黒さんが我さんの耳をほぢくつて居る、彼の肉付と云ひ、ニタツと笑ふてるとこは、ものでも云ひそうやなア」

「フム、此方の暖簾の間から首を突出して鼻を滴してる丁稚も宜う出來てるな」

「どれいな」

「彼の暖簾の間から顔を出してる、それ」

「阿呆、彼れは人間やがな」

「ア、そうか………人形屋のん御免なはれや」

「おいでやす、どうぞお掛け」